

母性の進化

東動物教學室

岡徹

ダンテの詩の中に、キリストのこととを吾等のベリカニア—Nostra Pellegrano—呼んでゐるところがあります。舊約聖書の詩篇の第百二篇六節にベリカンが荒野に居るとは書いてあります。が、これに據つてキリストのこととを吾等のベリカンで歌つたものとは思はれません。

そのところは實は古くからヨーロッパに傳つてゐるベリカンの親子愛に關する傳説に由來したもので、これは凡そ一千五百年前に、聖エピファニウスによつて書かれたものとされてゐます。或日のことベリカンの雛がじやれて嘴で母鳥をついて遊んでゐました。母鳥もそれに相手になつて嘴

で雛をつき返しつき返してゐるうちに、さうした機が雛が死にました。母鳥は悲歎に暮れて三日の間その死體を見つめて悲しんでゐましたが、そのうち遂に父鳥最後の手段を考へ、自分の胸を嘴で傷け流れ出る血を雛に與へました。するとさう思議にも死んだと思つてゐた雛がたちまち生き返つてきただと云ふのです。

これでは父鳥が血を流して雛を甦らしたのですが、後になつては母鳥がわれぞわが胸を裂いて流れ出る血で雛を養ふといふ形式をさるようになりました。

ところが今から四五百年前頃からは、これが母性愛、犠牲愛の標徴となり、遂には人類を愛するあまり血を十字架の上に流されたキリストを表すようになつてきました。バイロンの詩の中にも、ベリカンを荒野の鳥と呼んで母性愛を歌つたものがあります。ベリカンが紋章なきに用ひられてゐるものもこれらのこととに據つてゐるのだそうです。

此の傳説は本來、ベリカンの母性本能の習性に由來してゐるのです。ベリカンは喉に大きな袋があつてその中に赤味を帶びた半消化の食物を蓄へ、それを雛鳥に與へます。母鳥が首を曲げてあの大きな口を開けますご雛は二、三羽同時に母鳥の口の中に頭を入れてこの食物を食べます。ベリカンの此の半消化の赤味を帶びた食物を昔の人達は血さ思つた事からこの傳説が創られたのです。

鳥の中には他にも親鳥の半消化の食物を雛に食べさせす習性のものが少くありません。手近な例ではハトです。ハトでは母鳥の餌袋の内面の皮膚がお粥の様にさらりと溶けたものを口から吐き出しては雛に與へます。ハトの乳——Pigeon's Milk——とはこれを云つたものです。

母性愛^{ミカタ}か母性の犠牲愛^{ミカタ}かは人の母親だけがもつてゐるもの^ミでも思つて母性愛をあまりに感傷的に神聖化し女の人達がこれに自ら溺れ少しでも甘えるような^ミことがあつてはそれこそ獸に問へ、『然らば汝に教へん』^ミ訓へられるような恥しい^ミになります。

冷い言葉で云へば單なる母性愛は本能愛で、それだけならそれは鳥や獸や蟲けらももつてゐるのであつて、中には反つて人の母の及びもつかない様な犠牲的な或は周到な母性愛をもつてゐるもの^ミいくらもあります。しかもそれを苦にし或は誇らしげにしてゐるものはありません。

母性愛のあるものは、誰にでも誰に教はらなくとも、子供を妊娠してゐるものが少くありません。ウサギの雌は出産期が近づくと自分の胸毛を摘んでやがて産れ出る子ウサギの爲に柔な温い巢を作ります。ネズミは枯草で巢を作ります。

哺乳類の中には犬のやうに出産までは子供に興味を感じないが出産する^ミ他の犬の子供でも可愛がるやうになるもの

のあります。鳥は卵を孵化する前でも雛に興味をもつて居ます。然し中にはアヒルやツカツクリのやうに卵を産んでも後の世話は何もしないものもあります。

人間でも婦人にしばり男性型が見られます^ミが之れは副腎の分泌腺^ミ或は卵巢の疾患によつて男性ホルモンが生産される爲めであるこの報告もあります。

ラボー（一九二二）の實驗に依ります^ミ、ハツカネズミでは妊娠の前半期には仔ネズミを與へても何の反應も見られませんが、妊娠後半期の雌には母性本能が發達してゐるらしく、例へばネズミ類では、鳥でもそうですが、一般に巣を荒したりする^ミ危険を感じるものが子供を別な所へ運んで行く本能がありますが、妊娠後半期のネズミに仔を與へます^ミ母ネズミ同様に仔ネズミを安全な場所へ運んで行きます。次に妊娠後半期のネズミ^ミ母ネズミと一緒に置いて母ネズミの眞の子ネズミを與へます^ミ争が起ります。そして結局眞の母が勝利を得て仔ネズミを銜へて行きます。

このように、妊娠や出産が轉機^ミとなつていくつかの母性本能が目覺め或は強く發現してくるのは先づ或種のホルモンが分泌されはじめるようになる^ミことによる^ミことによる^ミことは明にされてゐるのです。がしかし分泌されたホルモンに働きかけられて目覺め或は發現を強くするようになるもの即ち母性本能の中権は何であるか、またそれは生物體の^ミの部分に

在るのであるかが問題になります。

このこゝに關して考へ易いのは女性の生殖腺系統に母性本能の中樞があるのではあるまいかといふこゝですが、そうではないのであつて、母性本能の中樞は生物の頭部に在るといふこゝが最近益々確實にされました。

その好い例はアメリカのホワイティング氏やウエンストラップ氏等が寄生性の地蜂の一種ハブロブランコを材料にして遺傳學的研究をしてゐるうちに得たもので、それは、ある蜂ではその體がモザイク的に雄の部分と雌の部分から形成されてゐるこゝが遺傳學的に確められました。この様な個體をチナンドロモルフ或は半陰陽體と呼んでゐますが、是等の中で頭が雄で胴が雌で雌の生殖器を具へて居るものがありました。この蜂は雄の本能を現して雌に近寄り交尾しやうこします。然し胴が雌なので交尾は出来ませんが産卵します。然し雌の本能である卵を産み付ける爲に毛蟲を刺し半殺しにする動作は見られず、反つて毛蟲など食つてしまひます。即ち性本能は全く雄である頭部に支配されてゐるこゝがわかります。

これに反して頭が雌で胸部が雄で雄の生殖器を具へて居る蜂では頭が雄であるために毛蟲を刺す刺は無いにもかゝわらず雌の本能を現し毛蟲に近寄り、これを刺しそれに産卵しやうこします。

こゝが體の左右が雌雄半半で形成されて居る蜂では外部生殖器が雄だと雌として動作し、雌だと雌として動作する事が観察されました。此の事は新たな興味ある問題を暗示するものですが此所では省略します。以上の事はブランコ毛蟲でも同様に観察されてゐます。

高等動作では犬で、一八七四年にゴルツ氏が、大脳を傷けると母犬は小犬に對して興味を失ふ事が實驗されました。そこで次には母性本能の中樞は大脳の何の部分に在るかを明確にしやうと研究が行はれました。

一九二三年にイタリーのチーニ教授は「脳と母性機能」なる論文に其の結果を發表しました。此れは鶏と、犬を材料にして行はれたもので、鶏では母性機能の中樞は大脳の前部に在るらしく、此所を傷けると雌に對する反應が弱くなるか或は其の期間が短くなる。時々する小犬が母鶏の下に匍ひ込んでも平然としてゐる。種々の内分泌器官は母性機能には無關係らしく、是等の器官を除去しても母性機能には何の變化も起きなかつたと報じてゐます。

犬ではその母性機能は大脳の皮質にのみ關係が在ると思はれます。百二十七匹の犬をお産の翌日に大脳の異つた部分を赤熱した白金針で焼いて傷けた。母犬の本能は普通一ヶ月續いて見られるが皮質を手術する一ヶ月位しか見られない。又大脳の前頭葉及び前々頭葉を傷けると母性機

能が見られなくなるか或は弱くなる。子犬を嫌ひ氣も荒く吠へたり咬みつく事もある。犬でも内分泌器官は母性機能に無關係らしいと報じてゐます。

人では大脳の前頭葉の傷があまり廣くなれば意識は全く普通ではありますが無慾状態が起ります。従つて哺乳しやうことはしませんが哺乳を拒絶する事はありません。勿論、傷が廣ければ意識の潤滑が起り複雑な意識的動作は全く見られません。

しかしチーニ教授の實驗で鶏や犬で觀察された事も、傷の大小に據る意識潤滑^{レバ}が無慾状態^{レバ}と相同のものであつて、母性機能の中権が大脳の特定の部位に在る事が明にされたことは思はれませんが。

母性本能の中にはホルモンによつて目覺め或は強められ

るもの^{レバ}、ホルモンにあまり影響されないもの^{レバ}がある事は容易に理解できる事ですが、最近フイリップ氏はネズミで實驗的に明かにしてゐます。ネズミでは仔を見つげ出^{レバ}、なめる^{レバ}、抱きかわいがる^{レバ}等はホルモンや他の生理的要因に關係なくはじまり、又持続されてゆくもので確かに神經機構がその決定の役をしてゐる事が明であるが、巢を造る^{レバ}、仔を護る^{レバ}、巣の上に永く留つてゐる^{レバ}等は體溫の調節や甲狀腺の機能の如何によつて目覺め或は強められるものである事を確めてゐます。

女は弱いが母は強い^{レバ}ふ様な言葉がありますが、これは單なる文學的なものではなく、實に生物學的な事實なのです。動物は一般に自分の生命を保存しやうとする本能が強いのですが、仔^{レバ}もがる^{レバ}一時その本能が弱く薄らいできます。巣の上に卵を抱いてゐる鳥を急に捕へようとする^{レバ}逃げないで反つてじつ^{レバ}巣の上に坐つてゐます。また雛の^{レバ}るる^{レバ}さきは人を恐れません。

脳の進化から觀れば人の母性本能は鳥や獸のそれよりもはるかに進化し高次のものである筈です。動物は仔を産むが母にはならない^{レバ}—maternity exists in humble forms, not yet motherhood—^{レバ}云つた人もありますが、動物もたゞ仔を産むだけではなく、母性愛をもつて育て、教育もします。

それならば人の母、母性愛とは何んでせうか。人の母性愛は進化した脳の中権の働きを全面的に發現したものでなければならぬ。しかしそれだけでは母性本能だけであつて單に高等動物の一種としての人間の生物的な母性愛であるに過ぎない。それではゴリラの脳の三倍も大きい進化した脳をもつてゐる人の母として恥かしい^{レバ}ではありませんいか。

母性愛は本質的にはこれまで述べてきた様な生物學的な、必然的な生理現象によつて起るものであるだけに、根

強いものであり、またそのうへ、妊娠、出産といふこれが強くなる生物學的な轉機があるのである。こもすれば母性愛は本能的になり盲目的になり易いのは仕方のないこことですが、それだけでは人の母とは云はれない。これに反して父親には父性愛を目覺まし強くする様な生物學的轉機は一つもありません。その父性愛は全く觀念的なもの、習慣的、修養的なもの、信仰的なものです。それだけに盲目的ではないことを云へます。

人間の母性愛が本能的な盲目的なものに止つてゐたので民族には何んの進歩も起らない。これから民族の母の愛は、全面的に發現された本能愛のうへに、あらゆる教養によつて洗練された、豊な情操を透徹した知的要素が加はらなければならぬ。

母性の機能が人類文化の保存と進歩に、國家の建設こその發展に、されば重要な役割を果してゐるか、改めて言ふまでもないことです。

その昔、ナボレオンが、民族の將來をトせんものはその母を見よ、と云ひましたが、よき母を多くもつ民族ほど强大ありましたし、將來も強大優秀なものになることは疑ふ餘地のないことです。よき母になることはまた女性個人としても人間として完成するもので、子供を産み、育てたこのない女的人は、すぐれた人であつてもどこか人間

としてその性格性質に缺けたものゝあるを免れません。そして家庭の母であるここから、社會の、民族のよき母となることを心掛けていたゞきたいものです。

男の先輩達はわが民族の男を世界の他の民族の男に敗けないものにまで訓練してきました。女の先輩達はわが民族の女人達をなほ一層の努力をもつて指導し訓練し世界のいかなる民族の女にも劣らない優れたものに女自身の手で訓練し向上させてゆかねばならぬのではないでせうか。

男も女を可愛がり過ぎていけないのですが、女も男に甘えたがつては女人の向上はないのではないか。それはお互がなほ一層精神的にも信仰的にも、そして智的には數倍の努力をもつて訓練されて後からくる人達を信念をもつて指導し訓練してゆかねばならないと思ひます。